

同志社大学大学院 GP 総括報告

「大学院 GP の挑戦—GP の成果と残された課題」

司会（永田） 同志社大学社会福祉教育・研究支援センター主催の大学院 GP 総括講演会を始めたいと思います。埋橋孝文センター長から「大学院 GP の挑戦，GP の成果と残された課題」と題して報告いたします。野村裕美本学教員からもご報告をさせていただきます。それではよろしくお願いたします。

大学院 GP（同志社大学）の挑戦——GP の成果と残された課題

埋橋孝文（同志社大学社会福祉教育・研究支援センター長）



2年半にわたって行われてきました同志社大学大学院 GP の活動について、その成果，残された課題についてお話をしたいと思います。午前中の格調高い阿部先生のご講演にもあったように、同志社の社会福祉の輝かしい歴史と伝統を引き継いで、私たち今のスタッフがそれをどう維持し、発展させていくのか、こうした重い責任を負っているかと思えます。以下のご報告はこうした重圧に耐えながら、少しでも歩を進める試みと理解していただければと思います。

今回の大学院 GP は通称でして正式には「組織的な大学院教育改革推進プログラム」と申します。そのうち私たちが提案したのは「国際的理論実践循環型教育システム」であります。すでにこの間、ニュースレター等をお配りしており、内容についてはご存じの方も多いかと思いますが、3つの柱からなっております。一つは国際アドバイザー・コミッティの設立と国際交流事業であります。二つ目はセンターの設立、同志社大学社会福祉教育・研究支援センターを設立し、センターとして教育・研究プロジェクトを推進していくことです。三つ目は大学院教育カリキュラムの改革です。これからその各々についてどういう活動していたか、どういう成果をもたらしたかについて説明させていただきます。

1. 国際アドバイザー・コミッティの発足と大学院カリキュラムの改革

国際アドバイザー・コミッティについては4人の先生方に委員になっていただきました。ダニエル・リー先生（アメリカ・ロヨラ大学）に委員長を務めていただき、2回にわ

たる報告書をまとめていただきました。他の3人はエデバルク先生（スウェーデン・ Lund 大学）、ジョーナサン・ブラッドショー先生（イギリス・ヨーク大学）、宋鄭府先生（韓国・尚志大学）です。この4人の先生方に積極的に関与していただいて、D-IAC と言っていますが、同志社大学国際アドバザリー・コミッティを開催いたしました。

第1回は去年3月、第2回は去年12月に催しました。A4で20数ページにわたるコンサルテーション・レポートを受領しました。

その中でどういう点が議論になったか。一回目は同時通訳を入れて行いました。2回目は通訳なしで開催しました。大学院で必修教科を導入すべきかどうか。同志社大学は主査決定時期がM2の最初、つまり、入学1年後に決めるということで、それについて、他にも必要単位数、マクロの制度政策論のための実習先の開拓などについて議論いただきました。フィールドワーク実習の必修教科化についてはコミッティの先生方の中で真っ向から意見が分かれました。しかし、これからはフィールドワークをするにしても確かな方法論、質的調査、量的調査を基本になければならないことについては4人の先生方は一致したかと思えます。マクロの制度・政策論についての実習先についてはダニエル・リー先生、エデバルク先生が紹介してくださいましたが、アメリカ、スウェーデンでは中央官庁、地方自治体、NGO、NPO、シンクタンクに実習、フィールドワークに半年、1年の期間で行っている。こうしたことも私たちにとっては新鮮なことでありました。

こうしたアドバイザー・コミッティの意見も参考にしながら、カリキュラムの改革をしたわけです。指導教授決定時期をM1修了時から半年早めた。修士論文指導の時間を新設した。実はなかったんですね。それを新たに設けたということでもあります。修士論文発表会を2回に増やした。2010年度、来年度からの実施です。博士論文構想発表会を新たに設けたこと。しかし振り返って、これらはそれほど先進的で他の大学院GPに比べて革新的であったかという、そうではありません。やっとな他の大学院並みになったのではないかというのが、私の率直な感想であります。今後は今の大学院システムのあり方を、やや長期的に考えていく必要があるだろう。その場合、研究職、アカデミズムの養成なのか、高度職業人なのか、それに応じて2年制の高度専門職業人育成にフォーカスした大学院、それとは別個に5年一貫制大学院ということを考える必要もあるのではないかと考えております。これは今後の課題になろうかと思えます。

2. 情報の発信基地としてのセンター

いろんな講演会、シンポジウム、ワークショップを開催してきました。詳細についてはお手元に詳しく資料を封入しておりますのでご覧になっていただければと思います。ここではそのうち最初と最後を簡単に紹介したいと思います。

3つ掲げております。中国、台湾、4人の先生方によるカンファレンス。GPの申請にあたって審査員から「同志社大学は韓国と密接なつながりがあるようだが、他のアジアとの関係は、そうでもない。今後、そうした連携に努めていただきたい」という意見があつて、

それがあったからではないですが、この間、中国、台湾の研究者をお呼びしてネットワークの構築に努めてきました。

院生主催国際セミナーを2回開催しております。同志社大学に新たにできました全学的なリサーチセンターであるライフリスク研究センターと共催する形でヨーク大学のジョナサン・ブラッドショー先生をお招きした講演会、中国の先生方を迎えての講演会を開催いたしました。

国内に目を向けて、これもすべてを紹介できませんので、1～2だけを紹介します。2年前、開設記念講演会を開催しました。経済学部の橋木俊詔先生を迎えてのシンポジウムなども開催しております。最近は大規模なもの、知的刺激に富むものですが、院生にとって、より身近なものは院生だけを対象にしたクローズドな小規模な研究会も開催しました。「院生の院生による、院生のための」研究会であったように思います。昨日も和歌山大学の古井さんをお招きして研究会を開催しております。

もう一つは社会調査法について、センターとして補強できることはないかと企画したものであります。質的調査を3日にわたって、量的調査を2日にわたって開催し、院生の人々が参加しております。

これまで国際が延べ575名参加。国内延べ805名が参加しました。しかし人数はそれほど問題ではありません。その意義を振り返ってみれば国際的な研究者をお招きして最新動向に触れることができたのではないかと。私自身、ジョナサン・ブラッドショー先生の **Minimum Income Standard, MIS** を用いた最低生活費についての講演会に感銘を受けました。日本でも生活保護、母子加算の問題をめぐる議論がされていますが、それぞれの根拠が不明確である。それに対して一貫して最低生活のあり方をラウンドリーのヨーク調査以降の伝統を踏まえつつ、生活者自身が参加して調査を行っていくという、MISを紹介したこの講演会は、日本の生活保護改革論議で欠けていることを私に気づかせるものであります。一例を挙げさせていただきましたが、このような最新動向に触れることができたのではないかと思います。

2番目は量的調査、質的調査をしたことによって、多くの研究者の発表が、確かな方法論を習得した上でのものであったことから、そうした点に成果を見いだされるのではないかと。ということでもあります。

3番目は院生自らが企画、運営する院生運営、院生主体の研究会、シンポジウムを設けたこと。研究コーディネーター、研究マネジメント能力を習得する機会になったのではないかと。7つの研究プロジェクトで共同研究の面白さと難しさを学ぶことになったのではないかと。思います。

今後の予定として、12月16日、「英語によるプレゼンテーションに向けた講習会（講義編）」、来年1月、「英語によるプレゼンテーションに向けた講習会」を企画しております。第4回院生による小規模研究会も予定しています。院生がどんどん査読論文にパスする、学振の特別研究員になる。こうしたことのノウハウを考えあおうということが研究会の趣

旨であります。

3. GPの成果と今後の課題

センターではこの間、7つの教育研究プロジェクトを設置してまいりました。「自殺予防」プロジェクト、「地域貢献」プロジェクト、「地域包括支援センターの機能に関する研究」プロジェクト等、あわせて7つであります。その中で「自殺予防」プロジェクトとか「地域貢献」プロジェクトは自主シンポジウム、ワークショップ、講習会を、この間、かなりの数にわたって開催してきました。

7つの研究プロジェクトの成果が2010年3月、『新しい福祉サービスの展開と人材育成』として本として出版されます。3部構成で、第1部が新しい福祉サービスの展開。第2部が明日の福祉を担うヒューマンパワーの育成。第3部が福祉サービスとヒューマンパワーに関する東アジア国際比較であります。これも私たちのこれまでやってきたGPの共同研究、7つのプロジェクトの成果であろうかと思えます。

もう一つは来年3月、韓国の二つの大学で英語による研究発表を行います。7つのプロジェクトのうち日程の都合のつく4つのプロジェクトが行く予定であります。内容はマクロ的なものからメゾ的なもの、ミクロ的なものと多岐に及んでおります。

その他の活動としてとりわけ採り上げたいのは、海外フィールドワークの実施です。量的、質的調査法と並んで院生の意見ではかなり好評だったようであります。2007年度は1名、試行期間でしたが、2008年度7名、2009年10名を予定しております。「海外で実習ができるのはサポートティブで、大学院在学中にしかない貴重な経験だと思えますので、ぜひ後輩のために継続していただきたい」という意見も頂戴しております。

今後の課題ですが、まだマラソンを走って向こうにスタジアムが見えてきたくらいなので、これまで走ってきた走り方を私自身、反省的に考えることはできておりません。もう少し時間がかかるかなと思っております。今回の機会で、それを考えることができるかなと思ってタイトルにしたわけです。今、考えていることはセンターの活動はあくまで大学院の専攻、正規のカリキュラム、スタッフなりへの側面支援、後方支援です。そうした活動でしかありえないとは思いますが。しかし一面、学則とか慣例とか前例とかしがらみがないことからフットワークが軽い。本体への最新情報、成果をフィードバックできるのではないかと。そういう支援がこうしたセンターの一つの役割ではないかと思っております。それをできることなら継続していけたらと思っております。

マラソンも9合目にきましたが、2-3年の短期間ですべてのことを実施できるわけではありません。「継続は力なり」、「サステナビリティが大事」だと考えています。3年のGP助成期間が来年3月で終わりますが、その後も最低限必要な活動は、私自身、継続していく必要があるのではないかと、現在、大学当局との交渉中であります。側面から、あるいは、後方から支援していく、今後もそうした継続的に機能を発揮していくことが、今、考えられる、とりあえずの課題かと思えます。2010年4月からセカンドステージに入ると考

えておりますが、その時にはより有効な活動を展開していければと思っております。

創立記念講演会に参加された方はご存じかと思いますが、その時に使った3つのK（K1：キラリと輝く教育カリキュラム，K2：金の管理に気をつけて，K3：体と心の健康管理）を心掛けます。今のところそんなに大きな問題はありませんが、家の玄関に辿り着くまでが遠足ですので、3月31日まで3つのことに気をつけながら有終の美を飾っていければと思っております。

4. 「事例をもたない教員」にならないために

最後にケース・カンファレンスについて指摘して終わりたいと思います。大橋謙策先生は、去年2月の講演で「事例をもたない教員」という表現を用いて現在の社会福祉教育の質的側面に対して、警鐘をならされました。私自身はこの点については門外漢で、ケース・カンファレンスについては素人ですが、素人考えながら社会福祉教育にあって、理論と実践の好循環を形成していくためには、そうした事例に関わる活動は必要不可欠だろうと考えております。申請の時からこうした福祉現場との結びつき、連携、共同作業を活動の中の一環に入れてきました。こうした点について、同僚の野村さんが献身的、精力的にこの間、理論と実践の好循環を達成するための橋渡しの役をしてきました。野村さんにバトンタッチして、GPの活動紹介の補強をしていただきます。以上で私の報告を終わります。

ケース・カンファレンス・スーパーバイザー養成講座事業報告

野村裕美（同志社大学社会学部社会福祉学科）



「ケース・カンファレンス・スーパーバイザー養成講座」に関する部分の事業報告をさせていただきます。研修会の運営事業が目指したところは研修プログラムの積み重ねにより地域に根ざした大学となること。そして社会福祉現場と大学との真のつながり、いいかえれば理論と実践の好循環をいかに育んでいくかということが最大の目標となりました。ケース・カンファレンスやスーパーバイザーの研修には学びの提供に生きた事例を提供していただく現任者の方々の協力が不可欠であります。当初、事業の開始時、どのくらいの参加者、ご協力いただく現任者の方々がいらっしゃるかということを中心

スタッフは心配しましたが、同志社社会福祉学会をはじめ、京都府下、近畿のさまざまな専門職団体、学会、社会福祉施設機関の皆さんに広報等のご協力を得ることができまして、

すでに延べ 360 人を上回る方々に参加，ご協力いただいているという状況です。研修当日の空気を味わっていただくために写真を交えてご説明させていただきたいと思います。

ケース・カンファレンスとスーパーバイザー養成講座の事業に関しては4つの柱で運営をしてまいりました。一つはケース・カンファレンス関連講座，ケース・カンファレンスで研究，指導経験の豊富な先生方をお呼びして2日間に分けて理論編と実践編を行う連続講座。そしてケース検討を少し角度を変えて考えてみようというケース・メソッドを採用した特別講座，そしてそれらの学びをもとに本学のスタッフが実際に現場の方々と事例検討なりスーパービジョンを行う定例講座です。

2つ目はスーパーバイザー養成講座です。3つ目は学生向けの事例にかかわる講座。そして4つ目は現任者，学生，市民による合同講演会，という内容で進めてまいりました。

1. ケースカンファレンス連続講座を開催して

1つ目のケース・カンファレンス連続講座の第一弾として本学の卒業生であります岩間伸之先生をお招きしまして「援助を深める事例研究の意義と方法」を2008年3月、「実践編」を5月に行いました。第2弾，「基礎から学ぶ事例検討会」。関西学院大学から渡辺律子先生をお招きして2008年10月，「実践編」は今年3月に実施いたしました。第1弾の「援助を深める事例研究の意義と方法」ですが，会場が満杯になる参加者98名を得ることができました。当日の参加者の方には現任者の方も多いのですが，この講座を学生や院生に対する事例教育法に対する研修の進め方，スキル等を盗みにきておられる教育研究関係者の方も，多く足を運んでいただきました。DVDを研修の中で使っていく様子。岩間先生も渡辺先生もDVDを活用され，そのタイミングの点で学びが大きかったというご意見をいただきました。

実践編では45名の希望者から「実際に岩間先生のもとでケース・カンファレンスの実際を体験したい」とお申し出がありましたが，先生のご意向もあり，抽選により20名の方に絞らせていただきました。当日は司会者役割，事例提供者役割の方の横に岩間先生が付いて2時間半のカンファレンスをご指導いただきました。

第2弾の「基礎から学ぶ気づきの事例検討」を12月末，現場の参加者103名を得ることができました。3月に行われた「実践編」では希望者27名，渡辺先生のご配慮で全員ご参加いただくことができました。渡辺先生のおっしゃるスーパーバイザーがいなくてもケース・カンファレンスができる，事例検討ができるということで，カンファレンスの運営方法についての示唆は，実に実践的でありまして，翌日から職場で使えるというご意見をたくさん頂戴しました。

2つ目の事業のケース・カンファレンス特別講座では連続講座と趣をえまして専門家らしくなることを目指す研修ではなく，ケースに直面した時，事例に直面した時，自分で知識，価値，技術を自ら組み立て直して現実の場面で対応していく力を養うことに焦点をあてて，ケース・メソッドの研修を行いました。講師には慶応義塾大学大学院の経営学管理

研究科非常勤講師の竹内伸一先生をお招きし、「ケース教材を用いた学びの共同体づくり」というタイトルで行いました。参加者は43名。当日の参加者は社会福祉領域の実践家だけではなく、看護、医学、経営学、教育学の教育現場で教育をしている広島、東京の先生方、遠くは北海道から足を運んでいただき、貴重な時間を過ごすことができました。

3つ目の事業として「ケース・カンファレンス定例講座」。私たちスタッフが2年間の学びを踏まえて地域にどう貢献できるかという、内からの発信を現在やっております。第1弾には実習研究プロジェクトと合同で、社会福祉実習現場で対応困難、指導困難な学生への対応をどう考えていくかという事例をとり上げながら具体的な実習指導のあり方を考えるワークショップを開催しました。

第2弾、第3弾は障害児通園施設の職場内研修、そして医療ソーシャルワーカーの自己覚知研修で、ケース教材を用いた討議法で、出張する形で、こちらから足を運びまして講座を開催する機会と協力を得ることができました。

第1弾の定例講座。参加者の方からのアンケートで「実践編、人数の少ないグループワーク、10名前後の研修会を今後、希望します」という意見が多く寄せられまして、この日も参加者10名で実施いたしました。第2弾は職場内研修でしたので、職場の職員全員に集まっただき研修を行いました。

2. スーパーバイザー養成講座の取組み

4つ目の事業として「スーパーバイザー養成講座」を、パート1～3にわたって、メイン講師としてルーテル学院大学大学院教授の福山和女先生をお招きしまして実施しました。サブ講師は浦和大学の対馬節子先生、ルーテル学院大学の非常勤講師萬歳英美子先生。本学の卒業生である文教クリニックの荻野ひろみ先生等をお招きして、きめ細かな濃度の濃い研修を行うことができました。

スーパーバイザー養成講座パート1の時の様子ですが、プロジェクト養成講座は2日間連続で金曜日夜6時半から9時まで。2日目は日曜日朝10時から16時まで、初日はイブニングセッションで始まります。仕事を終わられて研修会にかけつけていただいた39名の方にお集まりいただきました。スーパーバイザー養成研修に関しては参加型中心で行われ、二人のサブ講師の先生がメンバーの理解度を何度もラウンドして確認、評価し、質問に答えて行くという形できめ細かい対応で行われていました。

スーパーバイザー養成講座パート2は24名の参加。福山先生はロールプレイを多用され場面転換、ロールプレイを何度も繰り返していく研修を行いました。

スーパーバイザー養成講座パート3は、夏の社会福祉実習を実施する目前の時期に開催されたこともあり、先生のご希望で京都を中心とした保健医療分野で働くソーシャルワーカーの方に限定して募集しまして12名の方にお集まりいただきました。FKグリッドの活用と具体的な運用と理解ということで実施させていただきました。福山先生のご意見では現任者は1分でも立った状態でも仕事の合間にスーパービジョンができることを参加者に

伝えておられました。研修の合間にも立ったまま、研修が進んでいく、参加者の方に立った状態で細かい指示、指導をしていただく場面が多く見られました。体で覚えていただいて、中堅者級の参加者が現場で、そのまま活用できるようにという仕掛けをふんだんに盛り込んでいただいたかと思います。

5つ目の事業として学生向け講座。当事者による事例を用いた講座、「いのちの講座～いのちに向き合う2日間」と題して、いのちをバトンタッチする会代表の鈴木中人さんにお越しいただき、今年7月に講座を行いました。鈴木中人さんは小児癌でお子さんを亡くされて全国を講演活動等で回っておられる方ですが、その体験、経験を生かし、看護、カウンセラー、臨床心理士、社会福祉士を目指す学生、院生に対してこのような、いのちの講座を全国3カ所で展開、コラボということで実施しました。本学から17名の学生が参加しました。

6つ目は現任者、学生、市民による合同講演会です。東京にあります小児癌ネットワークMNプロジェクトと京都一期一会の現任者との訓練となっている団体、本学のセンターと3つの団体で共同する形で「ゴールドリボンキャンペーン 2009 in Kyoto」を開催いたしました。この頃、事例の研修のアンケートの中に「利用者の世界に迫り続ける事例検討を志していきたい。そのような研修の場をご提供いただきたい」という声が多く寄せられてきて、その声を形にしたいということもあり、ゴールドリボンキャンペーンを開催いたしました。基調講演には大阪大学総長の鷺田清一先生、シンポジストに多くの方をお呼びしました。参加者は170名、何より当日の運営スタッフとして本学と武蔵野大学の学生ボランティア50名で運営をすることが叶いました。シンポジストの方、子どもを亡くされた親の立場、小児癌自ら克服、晩期障害に今も取り組んでいる当時者の立場の方、きょうだい支援をしている立場の方、病棟等で子どもの療養生活に少しでも夢や希望をとという活動をしている4名の方をお招きすることができ、フロア参加していただいた小児癌の当事者の方、親御さん、医療関係者の方と意見を交わすことができました。

3. 受講者アンケートから

以上が主な4つの柱の報告になります。受講者アンケートをまとめしておきまして、受講前に本研修に期待していたことを整理しますと、標記されることにまとめあげることができます。一つは「タイトル、講師に魅かれて」。2点目は「ケース・カンファレンスやスーパービジョンに関しての具体的手順や進め方を知りたかった」。3点目は「その進め方は知っているが、反復学習、進め方の習熟度をセンターの研修の中で確認したい」というご意見。「そもそも理論を学び直したい」というご意見。教育実践にかかわっている方にとっては「教育実践のための参考、スキルを知りたい」。現場で指導者級の立場の方に関しては「指導者としてのスキルアップの場。職種を超えた交流を得るためにやってきたいと思った」「今困っていることに、今、すぐ示唆、助言をほしいからやってきた」というご意見として、期待していたことを、現在、まとめているところです。

今後の研修会に期待することとしてアンケートからの示唆も含めまして、受講者の多くの方からはセンターでの研修事業に関して期待する理念、方向性として「現任者がどんどん参画できる形の研修をお願いしたい」「利用者への世界に迫り続けるスキルや学びの場を提供していただきたい」「ネットワークづくりの場、人材育成について大学と現場が将来に向けて議論する場を開いてほしい」というご意見を多々いただきました。参加者の層の多様性が喜ばれて「これを継続してほしい」という声。「さまざまな方法、研究のスタイルを知る場、自分に一番合う方法を選択する場として継続的に開いてほしい」「現任訓練を受ける場としてセンターには頑張っていたきたい」というご意見を頂戴しております。

以上のことから、今後も来年に向けて、ケース・カンファレンスとスーパーバイザー養成講座に関しては「継続的な場づくり」と「魅力ある内部からの発信」としたところに視点をあて、継続、企画、立案、実施していきたいと考えております。機会がありましたら過去の事業、今後こういうことをしたらどうかというご意見もお待ちしておりますので、お寄せいただけたらと思います。報告は以上です。ありがとうございました。